◉アンケート

東大教師が新入生にすすめる本

このアンケートの特集は、大学の新入生のみなさんに贈るブックガイドです。一九八八年以来、今年で三九回目を迎えます。今回も含め、すでにご登場いただいた教師数は延べ八八二名に及んでいます。

左に掲げる設問の❶は先生方のご専門にかぎることなく自由に、❷は新入生が専攻を選ぶときのヒントになる本、その専門分野へのイントロダクションになる本、その分野の研究の奥行きを垣間見せてくれるような本についてお書きいただきました。

新入生のみなさんの読書プランの一助となれば幸いです。

❶私の読書から――印象に残っている本
❷これだけは読んでおこう――研究者の立場から
❸私がすすめる東京大学出版会の本
❹私の著書

＊回答者名は五十音順。品切中の本も掲載した。

加藤淳子（法学政治学研究科・法学部教授／政治学）

❶『困ります、ファインマンさん』R・P・ファインマン／大貫昌子訳（岩波現代文庫、二〇〇一）

ノーベル賞理論物理学者のエッセイの一冊。ロスアラモス原爆開発プロジェクト中に最愛の妻を失う悲劇にみまわれた若き日々を描いた前半は『ご冗談でしょう、ファインマンさん』とも共通するが、後半は一九八六年の米国チャレンジャー号爆発事故調査委員会での活躍である。事故の原因を一部品「Oリング」の問題と特定した上で、製造企業技術者も現場の技師も認識していた、この技術的問題が、NASAという巨大組織の上層部に共有されなかったことを事故の究極原因とした。人間と組織に関わるファインマンの調査は、社会科学者から見ても超一流で、真理探究において文理の相違や専門の障壁は存在しないことを実感させてくれる。原爆開発関係者に多い癌で、ファインマンが生涯を終えた直後、英文の原書と共に米国留学中に読んだ、忘れられない一冊である。

❷『職業としての政治』マックス・ヴェーバー／脇圭平訳／佐々木毅解説（岩波文庫　改版、二〇二〇年）

二〇世紀初頭に現れた職業政治家に焦点を絞り、「政治とは何か」と問う政治学の古典。「権力」「官僚制」「合理性」など社会科学の基本概念にも基づいた、一九一九（没前）年の講演でもある。先人が直面した現実から、時代を越える真実を引き出すのが古典の醍醐味であるゆえに、歴史的背景の理解は必須であるが、訳注に政治学者の解説も加わった本書改版は初学者に親切な構成である。「結果の責任を負う」ことを「倫理」とし、「どんな事態に直面しても『それにもかかわらず！』と言い切る自信のある人間……だけが政治への『天職』を持つ」。「職業としての政治」が重要となったのは民主主義ゆえである。人々が選ぶ政治家が、責任倫理と信条への献身や情熱をあわせ持つ――政治を天職とする――保証はない。ポピュリズムの時代に、選ぶ側の責任という観点から読み直したい古典である。

❸『日本の選挙制度と1票の較差』川人貞史（二〇二四）

選挙制度は民主主義の根幹であり、世論の関心を惹く一方、制度の多面的理解は困難である。「議員定数削減」と共に「一票の格差（較差）」は、日本の選挙制度の問題とされるが、それら問題と個別の制度との関係や理論的含意が吟味されることは殆どない。選挙制度の歴史的形成と変化とともに、これら制度に関わる運用及び理論上の問題を網羅し、現実の制度のあり方と理論的枠組の間隙を縫いながら書かれており、現在の日本の選挙制度の理解には必読の書となっている。

❹『政治学原論』加藤淳子（東京大学出版会、二〇二五）

政治学専門科目の導入として基本概念・理論を教えるという位置付けで、二〇年以上続いている法学部必修科目「政治学」の講義を編成し文章化した教科書。政治学を専門としない学生にも役立つよう、社会の現実を解明する学問として政治学を位置付けている。延べ一万人を超える履修者からの幅広い質問を受け、政治学や社会科学で

は当たり前とされている考え方を見直す機会にも恵まれて書いたのも思い出深い。政治学を超え、広く人間や社会に関心がある方に読んでいただければ幸甚である。

香田啓貴（こうだ ひろき）

（総合文化研究科・教養学部准教授／認知生物学、霊長類学）

❶職業柄、大量の活字を読む日々に追われている。研究に必要な知識は、いつも英文の査読論文から得たし、これからも素早い情報収集の習慣は続くのだろう。そのためか、自分のための時間には、できるだけ情報収集という作業から離れられるような活字に飢えていた。青年期から今に至るまで、繰り返し読むことの多い、特に旅先でひとりぼっちになるための本。

『東南アジア紀行』（上・下）梅棹忠夫（中公文庫、一九七九）

日本の霊長類研究は、今西などの京都大学の学者たちの探検科学に由来する。この書籍も、人類のルーツを求める東南アジアでの旅における当時の若い学者の報告書であり、ある種の探検記である。登場するタイ・チェンマイでのテナガザルの記述は、ちょうど僕自身がチェンマイでテナガザルの調査をする中で読みふけり、当時の状況と自分の体験を照らし合わせて過ごしたひとりだけの日々を呼びおこす。

『マレー蘭印紀行』金子光晴（中公文庫、二〇〇四）（初版、一九四〇）

梅棹からさかのぼり、マレー半島を旅した詩人夫婦の生活とマレー半島の状況が描かれる。まだ田舎だったシンガポールの情景やマラッカでの日々など。僕はマラッカに訪れていて、行き当たりばったりで宿を探して泊まり歩く日々を照らし合わせた。全く違う状況なのに、気配や香りは何故か同じで、調査任務から解放されるひとりぼっちのひとときが大切だった。

『マレー諸島』（上・下）アルフレッド・ウォーレス／新妻昭夫訳（ちくま学芸文庫、一九九三）

さらにさかのぼり、もう一人の進化論者ウォーレスの東南アジアの探検記。当時の自然史を知るために読み始めた情報収集活

動だったのに、探検記の躍動感に心を奪われ、朝までスマトラ島で読み耽った。読書とはひとりになるために必要な手段だと僕は思う。

❷今や多くの人が知る知識としての進化の論理、その論理の数理的な解説と演習書、そして、ヒトらしい他者を想像する心や言語の起源論。たくさんの知識が、「人とは何か」への興味を拓く。そのための知識として。

『利己的な遺伝子』リチャード・ドーキンス／日高敏隆ほか訳（四〇周年記念版、紀伊國屋書店、二〇一八）

これを読まずして大学を卒業してはいけない、と言われた。社会生物学の成立とともに広まった動物行動学の名著。

『数理生物学入門』巌佐庸（共立出版、一九九八）

利己的な遺伝子というキャッチーなメッセージの独り歩きを防ぐためにも、数式による理解は不可欠な作業。高校を出たばかりの数学の力のあるうちに、誰もが読破して欲しい。

『マキャベリ的知性と心の理論の進化論』リチャード・バーン、アンドリュー・ホワイトウン編／藤田和生ほか監訳（ナカニシヤ出版、二〇〇四）

数式では一筋縄ではいかない心の進化の問題を、霊長類を観察してきた心理学者の考えの集大成。少し専門的で高価だが、「社会的知性」の議論はここから始まる。

❸やはり僕は探検記から多くの知識と満足感を得る。

『新世界ザル（上・下）』伊沢紘生（二〇一四）

無能な僕にはとても到達できそうにもない孤高の動物探検記であり、深い知的興奮が得られる霊長類学者の近年の傑作。アマゾンの奥深くで謎に満ちたけったいな霊長類の姿を捉え、その進化に迫る独自の解釈は、実体験を持つものしか描けない説得力を感じる。

❹『進化と人間行動（第3版）』長谷川寿一・長谷川眞理子・大槻久・齋藤慈子・香田啓貴（東京大学出版会、二〇二六）

二〇年ほど前に長谷川寿一・長谷川眞理子夫妻によって執筆され、今も続く、教養駒場の授業の教科書。ヒトの心の進化を、豊富な実証研究を引用しながら説得力ある「人とは何か」に迫ろうとしています。僕自身が授業を継承した教員として、最新の文化進化や言語進化の話題も取り込んでいます。常に新しい人間行動進化学を学ぶための最初の一冊として。

小林研介（こばやしけんすけ）

（理学系研究科・理学部教授／物性物理学）

今から三六年前、私も皆さんと同じように駒場の新入生でした。駒場時代は「自分が本当に好きなものは何か」を追求できる素晴らしい機会です。積極的に自分の知らない世界に触れてもらえればと思います。読書も自分を深める良い手段になります。

❶『息吹』テッド・チャン／大森望訳（ハヤカワ文庫SF、二〇二三）

テッド・チャンは思考のユニークさや人間的な温かさという点で傑出したSF作家です。題名になっている「息吹」という短編は、平凡な日々の出来事が宇宙全体の成り立ちに繋がっていくという驚嘆すべきストーリーです。SFの魅力が詰まった宝石のような一編です。

❷『人類が知っていることすべての短い歴

史』（上・下）ビル・ブライソン／楡井浩一訳（新潮文庫、二〇一四）

研究者にとって最も大切なことは好奇心です。この本は、好奇心に満ちた著者が科学の世界を案内してくれます。科学と研究に興味がある全ての方におすすめできる、楽しくて元気が出る本です。

❸『固体電子の量子論』浅野建一（二〇一九）

私の専門は、物質の性質の解明を目指す物性物理学であり、この本は最新の教科書の一つです。実は著者の浅野君と私は駒場時代に同じクラスでした。長年の友人だからこそ、この教科書が彼の人柄通りの誠実で信頼できるものであることを断言できます。新入生の皆さんも、同じクラスに生涯の友人がいるかもしれませんね。

❹『東大物理の歩き方』小林研介・竹内一将・山崎雅人編（東京大学出版会、二〇二六）

このほど理学部物理学科の教員二八名が集まって、物理学の現在を紹介する本を出版しました。物理学の研究対象はこの世の全てであり、おそらく皆さんが想像している以上にその守備範囲は広いと思います。私たちの日常の研究風景が皆さんに伝われば と願っています。どうぞ手にとってご覧ください。

齋藤宙治（さいとうひろはる）（社会科学研究所准教授／法社会学）

❶『ボッコちゃん』星新一（新潮社、一九七一）

星新一氏の短編集は数多く出版されており、どれを選んでもよい。私は若い頃に全作品を読んで、感銘を受けた。視点を反転させる創造的な発想が魅力だが、よい文章のエッセンスが詰まっている。短い作品の中で、誰でも話を理解できるように、気取らず無駄なく平易に一文一文が書かれている。文章を書くときの手本にするという視点で、読んでほしい。

❷『法学を学ぶのはなぜ？――気づいたら法

学部、にならないための法学入門』森田果（有斐閣、二〇二〇）

「伝統的な法学があまり好きになれなかったのにもかかわらず、なぜか法学研究者になってしまった変わり者」の著者による法学入門書。法学入門書はいくつもあるが、法学を学ぶのはなぜかを伝えてくれる本はあまりない。高校生を対象に書かれた本だが、私自身が新入生のときにこんな本があったら、ぜひ読みたかった。

『スタンダード法社会学』佐藤岩夫・阿部昌樹編（北大路書房、二〇二二）

法社会学は、扱うトピックや研究方法が多岐にわたる学問分野であり、全体像を摑みにくい。その全体像をコンパクトかつ網羅的に解説してくれる、スタンダードな入門テキスト。

❸『社会科学のメソドロジー（1・2）』宇野重規ほか編（二〇二五）

東大社会科学研究所の直近の《全所的プロジェクト研究》の成果本。「価値」や「測る」といったテーマについて、法学・政治学・経済学・社会学などの様々な分野から多角的に論じられている。専攻を選ぶヒントになるし、異なる分野の研究者が集まることの意義も感じてほしい。同様に『危機対応の社会科学（上・下）』（二〇一九）や『希望学（全4巻）』（二〇〇九）などもおすすめ。

❹『子どもと法――子どもと大人の境界線をめぐる法社会学』（東京大学出版会、二〇二二）

子どもと大人の区別はあたかも当然のことだと捉えられがちだが、もっと慎重に考え直す必要があるのではないか。性差別や人種差別などと同様の発想で、「子ども差別」という視座の提示を試みた。

杉山昌広（すぎやまま さひろ）

（未来ビジョン研究センター教授・気候政策）

❶ *The Right Nation: Conservative Power in America* (John Micklethwait & Adrian Wooldridge, 2004, Penguin)

ワシントンDCにて米国政府インターンをしている時に手にとった。米国保守主義の潮流についての解説本である。政治ロビイストが軒を連ねるDCのKストリートもスタジアムでの大規模ミサも見たこともない私には刺激が強かった。同時に、トランプ政権につながる流れも垣間見た。Micklethwait氏は英雑誌 *The Economist* の編集も後に務めたが、MITではこの雑誌を購読している人がいかに多かったか。郵便受けからはみ出ているのを見て、理工系大学院生の知識欲に驚いた。

❷『ファスト&スロー――あなたの意思はどのように決まるか?』（上・下）ダニエル・カーネマン／村井章子訳（早川書房、二〇一四）

昨年、このコーナーで沖大幹教授が薦めていた本である。二〇〇二年のノーベル経済学賞受賞者によるこの本は、人間の脳は現代社会に完全には適応しておらず、人間の考え方には「癖」（ヒューリスティックとバイアス）があり、そのため思考がゆがめられることを解説する。専門家ですら条件が合わなければこの「癖」の問題から逃げられないということは教員の私にも耳が痛い。

❸『気候変動と社会――基礎から学ぶ地球温暖化問題』東京大学気候と社会連携研究機構編（二〇二四）

二一世紀の最大の課題の一つである気候変動について、地球のエネルギー収支といった自然科学的な仕組み、影響評価、適応策、緩和策、国際交渉、個人の行動まで俯瞰できる。非常に広範な課題を、科学的原理や歴史的背景などに立ち戻って解説した。化石燃料中心の社会経済からどのように持続可能なシステムに移行できるか、そのために、どうやってこの問題を根拠立てて考えるか、その道筋を明らかにする教科書である。

❹『気候を操作する――温暖化対策の危険な「最終手段」』（KADOKAWA、二〇二一）

太陽光発電や電気自動車などの技術は進み、政策の後押しによって先進国の二酸化炭素などの排出量は減っている一方、地球温暖化は悪化が続いている。こうした中、太陽放射改変など、気候を直接操作する技術群に関心が高まっている。こうした技術には倫理的問題、価値の問題が終始ついてまわる。禁止するのか、それとも一定の条件の下で使うのか。二一世紀、私たちが逃れることのできない問いである。

中野裕考（なかのひろたか）

（人文社会系研究科准教授／倫理学）

❶『うんこになって考える』伊沢正名（農山漁村文化協会、二〇二五）

日本のみならず世界的に猛烈な勢いで都市化が、そして住民の消費者化が進んでいます。都市住民は田舎、農林漁業、自然資源などに依存していながら、自らの生存基盤を軽視し、見下し、忘却する根深い傾向をもっています。近年ますます、学問も含めた社会の言説が都市の消費者の意識ばかりを反映したものになってきていることを、私は深く憂慮しています。伊沢さんに倣って一度、できれば青空の下で、野ぐそをしてみましょう。私もしたことがあるので分かりますが、言いようのない爽快感とともに、何が問題なのかがたちどころに腑に落ちるはずです。

『語学の天才まで1億光年』高野秀行（集英社インターナショナル、二〇二二）

英語でも第二外国語でも、たいてい配慮

の行き届いた教科書や辞書を用いて、解答の正誤を確かめる練習問題をこなすという、作為的かつ抽象的な学習法に、私たちは慣れきっています。しかし本来、言語の習得とはもっと体当たりで、混沌の中での手探りの試行錯誤だったことを著者は思い出させてくれます。

❷『やちまた』（上・下）足立巻一（中公文庫、二〇一五）

学問とは、ロールモデルを参照して自分が選択するキャリアなどではなく、むしろ気づいたときには取りつかれていて否応なくその道に引き込まれ、生涯を通じて続けられる、その様子が静かに、しかし感動的に描かれています。

❸『旧約における超越と象徴』［増補新装版］関根清三（二〇二一）

二千年以上読み継がれ多種多様な理解可能性が提示されてきた古典に、今でもまだオリジナルな新しい意味を、しかも学問的に根拠づけられた仕方で付け加えることができるのか！　と学部生のころ関根先生の講義を聞いて感動に打ち震えたことをよく覚えています。

❹『カントの自己触発論』（東京大学出版会、二〇二一）

読むことそれ自体が哲学することであるような仕方で向き合えば、一生の指針となるような学びを与えてくれるのが古典であり、古典にこのような仕方で取り組む姿勢を身に着けることが倫理学の基本だ、と訴えるために書きました。

納富信留（のうとみのぶる）

（人文社会系研究科・文学部教授／西洋古代哲学）

❶『意識と本質――精神的東洋を索めて』井筒俊彦（岩波書店、一九八三／岩波文庫、一九九一）

大学入学から少し経って、駒場生協書籍部に平積みになっていた本書を手にした。肌色と紅二色の瀟洒なカバーと、意味不明な二つの熟語を表題にしたこの本に、哲学に通じた先輩が「これは必読だぞ」と教えてくれた。早速読み始めたが、何度読んでも一定のところで止まってしまう。サルトル、芭蕉ら、あまりに異なる人物や思想が縦横に飛び交い、木の根のように私の理解は形を失った。その後、大学で哲学を教えるようになり、ようやく全体を把握した。知的な刺激、日本から世界哲学に挑む視野に圧倒される。

❷『科学革命の構造』トーマス・クーン／中山茂訳（みすず書房、一九七一／新版、青木薫訳、二〇二三年）

駒場では、すでに有名だった村上陽一郎と若き佐々木力が科学史の授業を担当していたが、先輩の中山茂が本書の翻訳者として知られていた。一九八〇年代、文化人類学や記号論と並んで科学史は光り輝いており、とりわけ本書を読まずに大学生とは名乗れない時代だった。まさに天動説が地動説に変わるように、学問と知への見方が変わった。

❸『仮面の解釈学』坂部恵（一九七六／新装版、二〇〇九）

『知と不知――プラトン哲学研究序説』松永雄二（一九九三）

私の指導教員が四〇歳で出版した本は、ポストモダンと日本古代が交わる独自の哲学である。その語り口に、読み返すたびに魅惑される。プラトン哲学では、松永の研究書が日本が世界に誇る成果である。今も

読み返しては新たな思考を促される。

❹『哲学の言葉を聴く――西洋古典哲学研究』（東京大学出版会、二〇二五）

『ギリシア哲学史』（筑摩書房、二〇二一）

『世界哲学のすすめ』（ちくま新書、二〇二四）

最初の論文集では、西洋古代哲学と西洋古典学が重なる細密画のような研究の世界をお見せする。逆に、文明の大きな像がほしい人には後の二書がある。遠近どちらの目も備えて、世界と時代を俯瞰しよう。

橋川健竜（はしかわけんりゅう）（総合文化研究科教授／アメリカ近代史）

❶『三くだり半と縁切寺――江戸の離婚を読みなおす』高木侃（講談社現代新書、一九九二）

電車の中で読み始めたら夢中になってしまった。降りる駅についても本を閉じられず、読み続けながらホームに降りたら、そのまま柱に正面衝突して額を切った。そもそも読みながら歩くのはダメで、特に駅ではなおさらだが（強調）、この有名な研究はそのくらい面白い。

❷『アメリカ政治の起源』バーナード・ベイリン／田中和か子訳（東京大学出版会、一九七五）

本書を含む一連の研究で、ベイリンは植民地期と革命期のアメリカ史像を一変させた。一八世紀イギリスの政治の場では少数派勢力が使っていた語り口を、同時代の北米英領植民地では多数派が使っていたことを論証し、近世イギリスの政治思想・文化の影響力と、北米独自の磁場について、研究者の感度を引き上げた功績は大きい。独立宣言二五〇周年の今年、こうした斬新な研究は現れるだろうか。

❸『アメリカ外交史』西崎文子（二〇二二）

一九世紀ヨーロッパ外交などとの対比でその理念的性格が強調され、一方的だ、硬直的だ、などの評価も受けてきたアメリカ合衆国の外交。だが理念的だとしても、単純だということにはならない。本書は理念が様々な局面で異なる文脈に置かれ、想定外の作用を及ぼしてきたその複雑さを、二

一世紀まで丁寧に綴る。外交における理念が揺らいでいる今だからこそ、少しずつ、ゆっくり読んでみよう。

❹『先住民vs.帝国　興亡のアメリカ史――北米大陸をめぐるグローバル・ヒストリー』アラン・テイラー／拙訳（ミネルヴァ書房、二〇二〇）

ベイリンの前掲書以降も、一八世紀北米の研究は進展している。今や研究者はスペイン人のことも、フランス人のことも、黒人奴隷の苦難も、先住民のしたたかさも視野に収めたうえで、例えば近世イギリスの政治思想・文化の影響を検討している。そうした多種多様な人物・集団が交錯するさまを一望させてくれるこの小さな本は、広い大きな世界に通じる扉だ。

橋本摂子（はしもとせつこ）

（総合文化研究科・教養学部教授／社会学）

❶『悪童日記』三部作（『ふたりの証拠』、『第三の嘘』）アゴタ・クリストフ／堀茂樹訳（早川書房、一九九一）

ちょうど大学に入学した頃に読み、その筆致に衝撃を受けた。「事実」だけを淡々と書くこと、つまり修辞を極限まで排し、最少の語彙で書かれた文章が、これほどの密度と重さを持ちうることに驚かされた。いわゆる文章「力」と呼ばれるものの本質を、初めて垣間見た気がする。新入生はこれから膨大な理論や概念、専門用語を身につけていくだろう。文理を問わず、自分の言語を獲得していくうえで、何度も立ち戻る原点として勧めたい。

❷『文盲――アゴタ・クリストフ自伝』アゴタ・クリストフ／堀茂樹訳（白水社、二〇〇六）

三部作を読んだ後は、ぜひこちらも手に取ってほしい。社会的排除や包摂といった社会学の主要テーマが凝縮されているが、それゆえに勧めるのではない。本書を読むことで、三部作は一つの出来事として、別様の意味づけをもって立ち上がり、読者は「双子」とは何であったのかを知ることになる。社会学は万人向けの入口を示すことが難しい学問だが、三部作とこの本を通じて体験されるもの――それが、私の考える社会学にもっとも近い。

❸『判断力批判　第一部――訳と詳解』イマヌエル・カント／小田部胤久訳（二〇二四）

カント哲学、とりわけ『判断力批判』を含む三つの批判書は、人間の認識や判断能力、いわば観測装置に関する厳密な仕様書である（少なくとも私はそう読んでいる）。邦訳は数多く存在するが、本書は精度の高い訳文と厚い注釈とを兼ね備えた、東京大学出版会ならではの贅沢な一冊である。人生のなかで、時間を気にせず好きなだけ一冊と格闘できる期間はわずかしかない。貴重な学部生時代に、細切れの拾い読みでは決して読めない本に挑戦し、生涯の財産を築いてほしい。

❹『アウシュヴィッツ以後、正義とは誤謬である――アーレント判断論の社会学的省察』（二〇二四）

ハンナ・アーレントは、全体主義という二〇世紀のカタストロフィと格闘しつづけた思想家である。本書では、アーレントがカントから継承し、独自に展開した判断論を軸に、規範論や現代社会への警句に回収される以前のアーレント思想の原像を捉えることを試みた。事実を事実として残し、思考を止めず、理解を開いたままにするこ

と――その意味で、本書で論じるアーレントは、最初に挙げたクリストフと一本の線でつながっているように思う。

藤崎（ふじさき）　衛（まもる）（総合文化研究科・教養学部教授／西洋中世史）

❶『薔薇の名前』ウンベルト・エーコ／河島英昭訳（東京創元社、一九九〇）（完全版、河島英昭・河島思朗訳、同上、二〇二五）

人は自分のものとは異なる時代、異なる場所、異なる文化に惹かれるものだ。そして自分の思考を揺さぶられる読書経験はなにものにも代えがたい。中世ヨーロッパの修道院を舞台にしたミステリ小説である本書を手に取ることで、私たちは写本文化や異端問題の根底にあるヨーロッパ思想史の水脈に触れることができる。事件の痕跡、書物の文面、この世界のものごとをどう解釈すべきか、知のあり方が読者に問われる。二〇二五年には新訳が完全版として刊行された。私は現在のところ未読であるが、エーコが加えた改訂を反映しているためぜひ新訳も味読したい。

❷『祖国のために死ぬこと』エルンスト・カントロヴィッチ／甚野尚志訳（みすず書房、一九九三）（新装版、同上、二〇二五）

宗教と国家の関係は古今東西を問わず常に問題とされてきた。政教分離が自明とされる現代日本でも両者の関係は看過されるべきではない。本書は『王の二つの身体』で知られるカントロヴィッチの珠玉の論文六篇からなり、西洋の中世のみならずその前後の古代・近代を貫いて宗教と国家の関係がどのように受け継がれ、あるいは変化をたどってきたのか理解するうえできわめて示唆的である。宗教性を帯びた「神秘体」として国家を捉えたとき、いかなる光景が見えてくるだろうか。

❸『中世ヨーロッパの政治的結合体――統治の諸相と比較』高山博・亀長洋子編（二〇二二）

中世シチリア王国史を専門とする高山博とその東大大学院ゼミ出身の研究者が主な寄稿者。中世ヨーロッパの比較国制史を長年探究し続けたゼミの成果が集合知として

まとまった。西欧・中東欧からビザンツ世界まで広大な地理的範囲を対象とし、王国から諸侯領、都市など様々なレベルでの領域統治の実態を解明するのみならず、教会や修道会といった宗教世界までも政治的統合体としてとらえるのが特徴だ。近代国家の成立以前における社会を理解するための有益な視座を与えてくれる一冊である。

❹『中世教皇庁の成立と展開』（八坂書房、二〇一三）

『世界史のリテラシー　ローマ教皇は、なぜ特別な存在なのか――カノッサの屈辱』（NHK出版、二〇一三）

二〇一五年は前教皇の死去に伴ってコンクラーベ（教皇選挙）が行われ、世界的にローマ教皇についての関心が高まった年だった。教皇制度の歴史を紐解くことは、現状の正確な把握のみならず、今後の展望を見通す一助となるはずだ。専門書である『中世教皇庁の成立と展開』は、宗教・政治組織としての教皇庁が歴史的に形成される過程を追い、各部局の制度や人的構成を具体的に解明した。一方、入門書の『ローマ教皇は、なぜ特別な存在なのか』は、「カノッサの屈辱」を手がかりとして古代から宗教改革までの教皇制度の歴史をたどる。キリスト教が社会と文化の基盤となっていた中世、そして西洋文明の根幹を理解するうえで少なからず役立つはずだ。

前川祐一郎（まえがわゆういちろう）

（史料編纂所教授／日本中世史）

❶『「文明論之概略」を読む』（上・中・下）丸山真男（岩波新書、一九八六）

『読書の学』吉川幸次郎（ちくま学芸文庫、二〇〇七［筑摩書房、一九七五］）

「何を読むか」を問うアンケートですが、「いかに読むか」も大切な問題かと思います。日本政治思想史・政治学と中国文学の碩学による、「いかに」を突き詰めた「読み」の実践の本を挙げました。前者は福沢諭吉の一つの著作を徹底して深く、後者は和漢の様々な書物の言語表現の様相を鋭く、精読しています。どちらも、私が充分に理解できているかは怪しいのですが、印象に残っている本です。

❷『中世の罪と罰』網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫（講談社学術文庫、二〇一九［東京大学出版会、一九八三］）

昔々の『UP』の連載がもとになった本ですが、現在は講談社学術文庫の一冊です。四人の日本中世史の碩学が、様々な中世の罪と罰を通して、現代とは異なる中世の法と慣習、そして社会を描きだしています。学術文庫版で増補された文献一覧と解説は、日本中世史研究入門としても有益です。一九八〇年代、日本中世の社会史や法制史の研究が最も輝いていた頃の、その最良の成果の一つにふれて日本中世史を専攻していただけたら……。そんな願いも込めて挙げました。

❸『日本中世法史論』笠松宏至（一九七九）

『戦国法成立史論』勝俣鎮夫（一九七九）

東大出版会の多くの日本史の名著の中から、私の専門に近い二冊を挙げました。❷にもお名前のある著者お二人は、日本中世の史料を「いかに読むか」を教えて下さった、私の恩師でもあります。いずれの本も、史料の厳密で深い「読み」にもとづいて中世の法と社会の像を一新した、画期的で魅力的な論文を収めています。論証を理解して読むには、ある程度の専門知識が必

要ですが、その結論には、「日本史の新説」として皆さんがご存知のものもあるかと思います。

❹『室町戦国法史論』（東京大学出版会、二〇二五）

室町幕府の徳政令と撰銭令、戦国大名の分国法などの中世史料を「いかに読むか」という問題に拙いながら取り組み、室町・戦国時代の法と社会の関係を考察した論文を収めた本です。

三枝洋一（みえだよういち）（数理科学研究科准教授／整数論）

❶ガブリエル・ガルシア＝マルケス／鼓直訳『百年の孤独』（新潮社、一九七二）（邦訳初版、私が読んだものは二〇〇六年出版）

架空の村マコンドの栄枯盛衰を克明に描いた小説。著者の祖国であるコロンビアの社会情勢を窺わせるリアリスティックな話と幻想的なエピソードが絡み合い、独特の世界観がつくりあげられている。調べたところ、この技法はマジックリアリズムと呼ばれているらしい。私の専門である数学は、公理という舞台を設定し、そこから論理と想像力によって新しい世界を構築していく学問だが、それと相通ずるところがあるかもしれないとふと思った。二〇二四年に文庫本が出版され、手にとりやすくなったが、ゆったりと世界観に浸るにはハードカバーも捨てがたい。

❷志村五郎『数学をいかに使うか』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇一〇）

日本が生んだ偉大な数論学者である志村先生が、非専門家に向けて、数学について語った本。文庫本であるが、スピン群や楕円関数、モジュラー関数など、かなり踏み込んだ内容も扱っている。序文の「要するに数学は学ぶにせよ教えるにせよ、きめられた伝統的な段階をふんできっちりとやらなければならないものではない」という記述を始めとして、初学者の参考になるアドバイスが多く含まれている。続刊の『数学の好きな人のために』『数学で何が重要か』『数学をいかに教えるか』も合わせて読むと得るところが多いだろう。

❸斎藤毅『微積分』（東京大学出版会、二〇一三）

数ある微積分の教科書の中でも特別な存在感を持った本である。不定積分や微分方程式を定積分の前に扱うなど、構成上の工夫も数多いが、何よりもまず、抽象数学を極めた著者による数学観が記述から感じ取れるところが一番の魅力である。この本で最初に微積分を学ぶのもよいし、講義で指定された教科書と読み比べることで理解を深めるのもおすすめである。

❹『数論幾何入門』（森北出版、二〇二四）

整数係数の方程式で定まる図形を調べる分野である数論幾何の入門書。モジュラー曲線という例を軸に、フェルマー予想や志村・谷山予想、ラングランズ予想、佐藤・テイト予想、BSD予想、ヴェイユ予想といった大定理・大予想の内容を解説した。大学一・二年生向けの全学自由研究ゼミナールがもとになっており、予備知識を極力仮定しないように努めている。さらに進んだ内容を学びたい読者に向けた『ラングランズ予想』（東京大学出版会、二〇二五）もある。

村田優樹（法学政治学研究科・法学部准教授／政治史）

❶青年期の読書は、世界の広さと人間の底知れなさに圧倒されるのが醍醐味で、外国文学はそれにうってつけだと思う。なにを読んでもいいのだが、ここでは私が十代の頃に読んで衝撃をうけた二冊を挙げたい。

『フェルディドゥルケ』ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ／米川和夫訳（平凡社、二〇〇四）

平凡社ライブラリーを漁っていて出会ったポーランド前衛文学の傑作。当時の私が東欧という地域と戦間期という時代に興味を抱く誘因となった。「大人になる」という主題と真剣に向き合うもよし、ゴンブローヴィッチ節の不条理ユーモアを浴びるもよし。

『アメリカの鱒釣り』リチャード・ブローティガン／藤本和子訳（新潮文庫、二〇〇五）

各数ページの連作短編にアメリカが映し出される、作者の代表作。藤本和子の名訳が、意味不明なのにノスタルジックという唯一無二の味わいをもたらす。

❷『グローバル化する世界と「帰属の政治」——移民・シティズンシップ・国民国家』ロジャース・ブルーベイカー／佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳（明石書店、二〇一六）

アメリカの社会学者ロジャース・ブルーベイカーが九〇年代から〇〇年代にかけて発表した諸論考は、民族／国民概念を動的、可変的にとらえる近年のロシア・中東欧史の潮流を理解するうえで欠かすことができない。B・アンダーソン、E・ゲルナー、A・スミスなどの著名なナショナリズム論の「古典」とどう違うのか、ぜひ吟味してほしい。

本書は著者の関心の変遷を反映した日本オリジナル編集の論集。ナショナリズムに関心があるならば、本書未収録の論文を含む英語の著作にもあたるのがよい。

❸『ウクライナ・ナショナリズム——独立のディレンマ』中井和夫（一九九八）

日本のウクライナ研究のパイオニアが、ソ連の解体とウクライナの独立の過程を、歴史学者としての知見と同時代の観察に基づいて丹念に論じる。独立主権国家ウクラ

イナが直面する国民統合や安全保障の困難を的確に予見しており、刊行から時間が経った今もなお、替えの効かない一冊。

❹『ウクライナの形成――革命期ロシアの民族と自治』（東京大学出版会、二〇二五）

実はウクライナでは、ソ連が解体した一九九一年より以前、一九一八年に一度独立国家が誕生していた。本書は、二〇世紀初頭のロシアにおいて、「ウクライナ」という政治的単位がどのように構想され、どのように実現したのかを、言説面と実践面の両面から分析した歴史研究。ウクライナ人という民族が国家をもつようになる過程を、「民族領域自治」という構想をめぐるウクライナ民族主義者とロシア自由主義者の相互関係を軸に跡づけた。

矢島潤一郎（やじまじゅんいちろう）

（総合文化研究科・教養学部教授／生物物理）

❶『監視資本主義』ショシャナ・ズボフ（東洋経済新報社、二〇二一）

書名には、自由な主体を前提とする「資本主義」と、人を管理の対象とする「監視」という矛盾する概念をあえて結びつけ、強い問題提起を含めています。著者は、市場を独占するプラットフォーマーによるデータ収集と利益追求の結合を「監視」と表現し、「監視資本主義と道具主義が形成した情報文明は、人間の本質を犠牲にして繁栄し、いずれ人間性を損なうだろう」と警鐘を鳴らしているのです。批判の対象はテクノロジーそのものではなく、それを道具として用いる人間の姿勢です。大学で学ぶことの一つの意義は、「皆が使っている」「教科書で説明されている」からと当たり前に受け入れているものについて、その前提や仕組み、本質を問い直すことです。日常的に利用しているネット検索やSNSについて考え直すことは、大学での学びの良い出発点となるでしょう。

❷『細胞の行動力学』中垣俊之・石川拓司編（東京大学出版会、二〇二五）

自然科学は大きく発展してきましたが、生物については、いまだに理解しているとは言えません。単細胞生物でさえ、どのよ

うに環境を感じ取り、行動を決めているのか、十分に説明できません。そのため単細胞を作ることも、今の科学では不可能です。本書は、細胞のふるまいを「行動力学方程式」で説明しようとする、従来の生物学にない視点から学ぶ一冊です。

❸『普遍生物学』金子邦彦（二〇一九）

本書は、「生きている状態」に共通して成立する普遍的性質とは何か、生命現象を個々の事例に依らず、原理的に理解し体系的に学問化できるかを模索する試みです。実はこれは超難問で、我々後進に託された課題でもあります。

❹『物理・化学・数理から理解する生命科学』東京大学生命科学教科書編集委員会（羊土社、二〇二四）

大学で生物を学ぶということは、さまざまな学問分野の知識を総動員して、生きものを理解しようとすることに他なりません。本書は、記述的な説明が中心となりがちな生命科学の教科書とは異なり、比較的簡単な問題を計算することで、理解の土台を築くことを目指しています。生命科学分野に進む学生に、ぜひ自学してほしいです。

山口利恵（やまぐちりえ）

（情報理工学系研究科准教授／情報セキュリティ）

❶『オリエント急行殺人事件』アガサ・クリスティ（早川書房、講談社ほか）

本作は、名探偵ポアロが複雑に絡み合った事象を解き明かすクリスティの代表作である。パズルが完成していくような終盤の収束が評価されているが、その裏にある緻密な準備の「プロセス」を考察する点が私にとっては面白い。一方で、物語の端々には当時の実社会を反映した人種的な偏見や「小さな差別」が描かれており、それは現代社会にも形を変えて存在している。私自身、海外での経験を通じてこうした描写を思い出すことも多く、人間社会の本質かもしれないと感じる。原著も読みやすいので、洋書に手を出す一つの足がかりに。

❷『パズル通信ニコリ別冊　パズル・ザ・ジャイアント』ニコリ編（ニコリ）

学生時代、研究に必要な思考を研ぎ澄ませるために活用したのが、数独の発祥として知られるニコリのパズル雑誌である。特に巨大なパズルを収録した「ジャイアント」シリーズは、一つずつ論理を積み上げる過程が研究の思考プロセスと似ており、自分のコンディションを測る計器として活用した。実際、パズルを解いてから臨むのとそうでないのとでは、仕事の効率に差が出るほどだった。デジタル全盛の現代において、紙と鉛筆で誌面と格闘するアナログなスタイルは時代遅れかもしれないが、今なお良質な「頭の体操」として有効である。

❸『基礎統計学Ⅰ　統計学入門』東京大学教養学部統計学教室編（一九九一）

教員として大学に戻ってからも、基礎的な議論を深めるための復習に欠かせないのが本書である。シリーズを通して常に横におき、ふとした瞬間に忘れてしまいがちな「統計の常識」を確認するために活用している。シリーズのⅡやⅢも同様である。

❹『目指せ！プログラミング世界一 ――大学対抗プログラミングコンテスト　ＩＣＰＣへの挑戦』筧捷彦編（近代科学社、二〇〇九）

昨今、生成ＡＩの普及により「人間がコードを書く必要はない」という風潮があ

る。確かに簡易なプログラムはＡＩで代替可能だが、そのＡＩ自体も緻密なプログラムの集積であることも事実である。基礎的なアルゴリズムや理論の深い理解がなければ、ＡＩを使いこなせても、新たな価値を創造することはできない。プログラミングの習得は計算ドリルのような地道な反復作業だが、その作業を少しでも楽しむために、プログラミングコンテスト等を活用してほしい。

米山正樹（よねやまま さき）（経済学研究科教授／会計学）

❶『暇と退屈の倫理学』國分功一郎（新潮文庫、二〇二二）

何となくわかったつもりでいる退屈の源泉を丁寧に紐解いている。噂通りの面白さである。何度読んでも、すっきりとした納得感とモヤモヤ感が混然一体となった気持ちにさせられる。学術的に物事を考えることの必要性と楽しさを感じさせてくれた。

『統計でウソをつく法――数式を使わない統計学入門』（ダレル・ハフ／高木秀玄訳、講談社ブルーバックス、一九六八）とともに、新入生に強く薦めたい。

❷『実証理論としての会計学』R・L・ワッツ、J・L・ジマーマン／須田一幸訳（白桃書房、一九九一）

原著タイトルは *Positive Accounting Theory* であり、まさしく実証会計理論の嚆矢と位置づけられている名著である。

『財務報告革命（第3版）』（ウィリアム・H・ビーバー／伊藤邦雄訳、白桃書房、二〇一〇）とともに、「会計情報は（無条件に）有用である」という神話から会計学分野の研究者を解放し、当事者のインセンティブに根ざした経済学の分析モデルによって会計現象に合理的な解釈を与えている。

❸『企業会計とディスクロージャー（第5版）』斎藤静樹、浅見裕子・荒田映子補訂（二〇二五）

ある学問に興味を持つかどうかは、初学者としてその分野のいかなるテキストに出会うのかに依存する。このテキストは厳密さを損なうことなく、かつ会計を支えている基本的な考え方を簡潔に記している稀有な存在である。今回、十五年ぶりの改訂が果たされたこともあり、会計学にふれることとなった多くの方々に目を通してもらいたい。

❹『会計制度の事前評価と事後評価』大日方隆編著（中央経済社、二〇二五）

日経・経済図書文化賞をいただいた『投資のリスクからの解放――純利益の特性を記述する概念の役割と限界』（秋葉賢一・浅見裕子との共著、中央経済社、二〇二三）との間で迷ったが、最終的にこちらを選んだ。会計基準設定を取り巻く環境が変化するのに伴い、研究者に期待される役割も変化する。本書は今後研究者が果たしうる役割を丁寧に論じている。